慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	シャルル・ペギーの<<ジャンヌ・ダルク>>
Sub Title	"Jeanne d'Arc" de Charles Peguy
Author	田代, 葆(Tashiro, Shigeru)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1981
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.42, (1981. 12) ,p.258(83)- 282(59)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00420001-0282

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

シャルル・ペギーの《ジャンヌ・ダルク》

田代　葆

[I] 1897年の「ジャンヌ・ダルク」まで

ペギーがジャンヌ・ダルクについて書き初めたのは1895年，彼がエコール・ノルマル・シュペリュールに在学中のことである。ペギーは '95年7月から '96年10月まで[1]同校を休学し，故郷のオルレアンに戻って3幕から成る戯曲「ジャンヌ・ダルク」を書いた。

ペギーとジャンヌ・ダルクの結びつきは，彼の生地が[2]オルレアンであることからその幼年時より強く[3]，更にエコール・ノルマル受験の為，兵役を終えたペギーが過ごしたサント＝バルブ校時代，1893年—1894年，彼が社会主義に馴染み，信仰を失なってゆく過程において，彼のジャンヌは，カトリックの教権主義に抹殺された，純粋な心根を持つ悲劇の《女性》[4]として意識される様になる[5]。

ペギーは彼なりの準備[6]をし終わると《ジャンヌ・ダルク》執筆を開始する。《僕は，彼女が僕の目の前を通過していったかの様に，この物語に取り組んでいます。》と彼は友人のカミール・ビドーに書く[7]。作品は1897年12月末に完成する。

この間に，ペギーはその精神的支柱であった無二の親友・マルセル・ボードワンを失ない[8]，1897年10月にペギーはマルセルの妹と結婚[9]している。

「J·D」の成立背景を考える時，このマルセル・ボードワンの存在は非常に重要である。ここにペギーの雑誌とも言える「半月手帖」(1900年，4月5日号)[10]に，ペギーの手による次の様な記述がある。

《私は，友人のマルセルとピエール・ボードワンが，3部から成る劇[11]に着手している数年間，その事を真剣に考えていた。そして彼らは1897年6月

に書き終わり，その印刷は同年12月末に終了したのだ。》

引用文冒頭の《私》の《友人》マルセルとピエール・ボードワンに関して言うなら，マルセルとは，マルセル・ボードワンのことである。ならば'96年に夭折したマルセルが，'97年の「J·D」の完成，印刷に立ち合うはずはない[12]。またピエール・ボードワンとは，実在の人物ではなく，シャルル・ペギーその人であり[13]《私》である。つまりペギーは亡き友人，マルセル・ボードワンとの共著の体載をとりつつ，作品「J·D」の中に，友人との精神的つながりを具現させようとしたのである[14]。

ペギーとボードワンがどの様な点において精神的に一致していたか，と言う問題は，ボードワン家の家風全体に関わり，同時にそれは若いペギーの思想と一致する。即ち，自由主義的，社会主義的，更には強烈な反カトリック主義的思想である[15]。その思想を再びペギーが友人ボードワンとの対話として「J·D」とほぼ並行して書かれた作品が'98年に脱稿した《マルセル，調和ある都市に関する第1の対話》である。この《対話》などどこにも見当らない作品もまた《マルセル》が正題であり，他の部分は副題である。マルセルとはマルセル・ボードワンを指し[16]，著者は再びピエール・ボードワン，即ちペギーである。従ってこの書は，ペギーの個人的な死者との対話であり，実際に書かれた内容は亡き友人と共に夢見た〈ユートピア〉の表明である。

この様に，「J·D」及び「調和ある都市」の2作品は，共にマルセル・ボードワンの影響下において執筆されたペギーの初期の2大作品であり[17]，原理的にカトリック（またはキリスト教の神）を否定した上での思想が，1方では劇作品として，また一方では（比喩的に）福音書的な体裁をもつ奇妙な散文作品として示される[18]。

「調和ある都市」の概要は次の通りである。調和ある都市は権威と管理の原理を否定し[19]，競争の概念を否定し[20]，それを構成するものは個をもってつねに全体を目指す[21]動物社会全体を[22]包括する調和のある都市であり[23]，そこでは精神及び肉体の調和は完全に保たれ[24]，学問，芸術はすべて保障され[25]，内的精神生活は[26]無名性，無償性の原則を踏まえ[27]，すべての普遍性を目指す

（あるいは保障された）未来を指向する[28]魂の飛翔の場[29]，都市である。現代文明は否定され[30]，古代社会は復活し[31]，その古代はフランスの古代，中世である[32]。しかしその都市は超自然的なものを受け入れる事はせず[33]，万物の精神に自由に，自然に宿る古代の英知を継承[34]する。即ち，我々が望みうる最高の調和ある《都市》なのである。

このユートピア，エデンの楽園的発想[35]には社会主義者ペギーの理想がこめられており，現代社会の在り方を強く拒否する，謂わば原始共産制指向さえ示す作品（内容）と言える。更に重要なことは，ペギーの晩年の詩作品「エヴァ」(1913) につながる《楽園》の原型が散見されるものの，この作品でのペギーの《都市》は，はっきりと非天上的なものであり，地上の《都市》なのである[36]。即ち，それはペギー（とボードワン）が夢見た具体的な社会主義ユートピアであり，世界的社会主義共和国の共和国的ユートピア[37]なのでありジャンヌ・ダルクが世の悲惨を嘆きつつ天なる神にそれを告発するとき，彼女をとりまく《この世》の裏返し，成就された理想の《都市》なのである。

[II] 作品としての「ジャンヌ・ダルク」

3部から成る '97年の「J·D」はおおよそ次の様な場面構成（内容）をもつ。

A） 第1部：「ドンレミ」は3幕構成である。5場から成る第1幕は1425年盛夏のドンレミを舞台とし，ジャネットとオヴィエットの対話に初まり，修道女ジェルヴェズとの対話を経て，ジャネットの長いモノローグで終わる[1]。

4場から成る第2幕は，1428年5月初めのドンレミを舞台とし，ジャンヌの伯父[2]のデュランとの対話に移り，ドンレミ出発を決意したジャンヌがその父母に別れを告げ（騙す）ドンレミを発つ朝までが描かれる[3]。

1場から成る第3幕は，1429年1月のドンレミを舞台とし，ボードリクール[4]に追い返されたジャンヌが，伯父のデュラン[5]と共に再びドンレミを発

つ決意が描かれる。[6]

B） 第2部：「戦闘」は同じく3幕構成である。3場から成る第1幕は，1429年4月30日[7]のオルレアンを舞台とし，ジャンヌのオルレアン入城，イギリス軍との戦闘の様子がジャンヌと多くの登場人物との対話の内に描かれ，[8] ジャンヌの行動に対する人々の評価，意見が示されてゆく。[9]

4場から成る第2幕は1429年9月8日[10]，9月9日，9月10日，9月13日のパリとサン・ドニの中間，ラ・シャペルの村を舞台とし，ジャンヌのパリ市攻略の失敗と，ジャンヌをとりまく人々の離反（別離）が描かれる。[11]

1場から成る第3幕は1430年3月下旬のスュリー・スュール・ロワールのラ・トレムイユ城の一室を舞台とし，孤立したジャンヌと戦意を失なったフランス王シャルルⅦ世との束の間の会見を軸に，再び戦おうとするジャンヌがオルレアン市民に助力を乞う様子が描かれる。[12]

C） 第3部：「ルーアン」は2幕構成である。第1幕は5場から成り，1431年2月下旬[13]のルーアンの城の王家の教会におけるジャンヌの弾刻裁判に集まる多くの聖職者，神学者等の対話に始まり，ジャンヌに対する審問が繰り広げられ，ルーアンの城の大塔でジャンヌを監視する役人達の会話部分を挿入しつつ獄中のジャンヌが描かれ，同年5月24日朝までが描かれる。[14]

第2幕は非常に短かい1場から成り，1431年5月30日[15]，処刑を前にした獄中のジャンヌの短かい祈りの場が描かれ，全篇の幕が下りる。[16]

[II]—A 特色

ごく簡単なあら筋でも分かる様に，「J·D」は史実に忠実であり，13歳のジャネットから火刑台直前のジャンヌまでを描いている。この点ジャン・アヌイの「ひばり」(1953)，火刑台上のジャンヌを描いたポール・クローデルの「火刑台上のジャンヌ・ダルク」(1934) とも異なり，ペギーの「J·D」は，ジャンヌの史実における魅力的なエピソードのいくつかを省いているとは言え，[17] 登場人物もまた実在の人物が多数登場する[18]史劇である。従って，問題になるのは，史的に完結され，フランス人にとって最も親しみ

深いジャンヌの物語を，史劇として再生させるなら，作者ペギーはその個人的思想を，動かしがたい歴史の推移の余白にどの様に狭み込み，その操作を通じていかなるジャンヌ像を作り上げたか，と言うことになる。

'97年の「J·D」には，地上的な悪を告白するジャンヌの姿が色濃い。

ここに，実在の人物とは別個に創造された2人の人物，オヴィエットと修道女ジェルヴェズは，「ドンレミ」の場を形造る重要な人物達であり，2つの典型（性格上の）である。

10歳のオヴィエットはフランスの固有性，フランスの帰属性(王太子へ，神へ）など考えない平凡な娘[19]であり，イギリス軍が守ってくれるなら，それを耐えればよく[20]，神に何度も祈ったが叶えられなかったのだから，神もまたイギリス軍の強さを認めているのだ[21]，と考える。だから，百姓は自分の畑を耕やす事に精を出せばいいのであり[22]，神の御意志にまかされた事を，我々がとやかく口出しするものではない[23]，と言う。従って，オヴィエットはジェルヴェズがその母を捨てて修道女になった意義よりも，むしろその事実によって彼女の母が深く悲しんだ事実に注目する[24]。このオヴィエットはジャンヌの1面を示す存在であり，小教区[25]にしっかりと根ずいた純朴な父母愛，大地への愛，神への愛を併せ持つ現世的な存在，百姓の性格を有する[26]。一方，修道女ジェルヴェズは教会そのものを象徴し，その権威，神への帰依は絶対である[27]。すべては，キリストに倣うことにある。《イエズス様は福音を説かれました。イエズス様は祈られました。イエズス様は苦しまれました。私達は，私達のもてる努力のすべてを傾けてイエズス様を倣わなければならないのです，……これが私達がこの世で為さねばならないことなのです。それは，もし私達が真に他の人々を，臆病にも，地獄落ちさせること，そして他の人々と共に私達が臆病にも地獄落ちになるがままになることを望まないならばです[28]》

魂が地獄に落ちる事，即ち，救いなき死への恐怖感は，当時のペギーの不安を象徴する固定観念であった[29]。と同時に，ペギーは長い間，キリスト教（カトリック）の説く《地獄落ち》を，1種の精神的脅迫と受け取っていたのである[30]。ペギーはこう書く[31]。

《だから，私はキリスト教の信仰に戦いを挑むでしょう。その信仰において，我々に最も無縁で，言ってみれば，我々にとって最も嫌らしく，野蛮なもの，そして我々にとって決して容認出来ないもの，しかし良きキリスト教徒の心に付き纏っている，またそのために良きキリスト教徒も逃げ出すか，こっそり背を向けるものは，先生，それはこの様なものなのです。つまり，我々が地獄落ち，と名付ける生と死の苛妙な結びつき，存在しないものによる存在へのあの奇妙な裏ずけ，永遠なるものによるすべての裏ずけなのです。人間性を分かち与えられた者，それを己れに付与されたすべての者は，決してこの様なことに同意したりしないでしょう。》

この地獄落ちへの恐怖感は修道女ジェルヴェズにおいては，イエズスに倣う事で乗り超えられている。むしろ充足している。即ち，修道女ジェルヴェズは，悲しむ母を捨て修道院に入ると言う犠牲を払いつつも，教会の域内でつつましく保持する信仰の故に，天上よりの訪れの時と様相を，それが訪れるまでじっと神に委ねる人間，神にすべての信依を置く人間（修道女）なのであり《主よ，私は知っている，人の道の主は，人ではないことを。歩く人の歩みをどちらに向けるかは，人の手にはない[32]》と確信する典型である。だが，ジャンヌにとって，人の世は災いに満ちており[33]，神の聖性を世にもたらす為には，戦わねばならないのである。〈地獄に落ちない者〉も，〈地獄に落ちた者〉も，同様1つの絆で結ばれた，人間と言う《都市》に住むべきなのだから。

修道女ジェルヴェズが帰ったあと，1人ジャンヌが祈る言葉は痛切である。

《神よ，私に，戦闘の為の良き指揮官をお与え下さいませ。[34]》

しかし，その指揮官がジャンヌ自身である時，彼女は分身のオヴィエット，即ち「教区」＝ムーズ川を捨て，分身，修道女ジェルヴェズの《祈り》を超え，自ずから，神から託された聖なる使命を（歴史的）現実の中で，現実的な方法（戦闘）によって遂行せざるをえなくなる。神の御子イエズスの磔刑の意義は，以後ジャンヌ自身のルーアンでの火刑台への道程，意義に転移する。従って，イエズスの磔刑が弟子達の離反の末に，《面罵，

嘲笑，侮辱，拷問，犯罪者としての苦悶の死が含む一切の挫折，失敗，愚，暗闇[35]》を与えられつつ行なわれた様に，ジャンヌの神から与えられた（超地上的）メッセージ[36]に由る使命の成就もまた，はっきりと地上的な力，政治力，教会権力によって否定し尽される。

第2部「戦闘」の後半から第3部「ルーアン」において，ペギーが原資料から選び出し，描いたジャンヌの孤立してゆく姿，及びその孤立を演出する地上的勢力の諸相のくっきりとした輪郭描写はこの作品中の白眉である。

《おお，神よ，今，ルーアンが私の家でなければならないのなら，私の祈りをお聴き下さいませ。この祈りを，私の本心よりの祈りとしてお聴き下さいます様に，何故なら，まもなく，私がこの獄屋を出，外に出，……そしてあの広場で，私がどんな振舞いをいたし，何を口走りますのか，私には見当もつかないからです。神よ，私を許したまえ，あなたにお仕えしながらも，私が犯したすべての悪を許したまえ。でも神よ，私は，私はあなたに忠実であった，と心得ております。私達はこの様にあなたに忠実にやって参りました。私の《お告げの声》は私を欺きはしませんでした。

でも神よ，だからこそ，私共すべてをお救い下さいませ，我が神よ，どうか。

イエズス様，私共すべてを永遠の生命へとお救い下さいますように。[37]》（強調は筆者）

この「J·D」最終部のジャンヌの《小さな祈り》は，短かいが故に痛切であり，痛切であるが故に神の無情を責める響きが読みとれる。

——神よ，正気の内にこれだけは言っておきたいのです。神のお告げに忠実だったのは自分だけではなく，私達，と言う複数であった。みんな忠実だった，神に対して。だから私は皆が（世の人々＝地上）言う様に罪を犯したとは思いませんが，私は皆に罪を犯したと責められ，今火刑台に登ろうとしています，神よ，あなたに忠実だったのに。私は間違ってはいないのです。——

これは，地上的勢力に押し流された敗者の言葉である。救世と地上の聖

性，神の正義の成就を望みつつも，地上の正義に，即ち，権力と権威と支配の正義に，真実が打ち負かされたのである。《だからこそ》に続く部分，2度にわたる《でも，神よ》に続く部分，即ち神への祈願の何と弱々しい事か。これは，神への期待を失なった者の，むしろ瀆神的とさえ言える恨みつらみである。[38] この響きを，我々は1910年の大作「我らの青春」に再び感じるのである。（それは，本稿では多くは触れないペギーのドレフュス（事件）体験に由来する事は言うまでもない。[39]）

《すべては神秘に初まり，政治的に終わる。すべては，1つの神秘によって，その（固有の）神秘によって，そして政治によってすべては終わるのだ。[40]……政治家共は，我々が彼等の政治の責任を負う事，我々が彼等の政治路線を歩み，彼等の連繋の中を歩む事，彼等の政治的見解を支持する事を欲求し，彼等の政治，彼等の政治的妥協，彼等の政治的解決の為に，我々の神秘を彼等は裏切った。[41]……今，事件は終わった。それは我々の幻影はでなかった。[42]……我々は，だから今日こう言う事が出来る。我々は最初，正真正銘の反ドレフュス主義に勝利し，次には似非ドレフュス主義者に打ち負かされ，今日では，ついに我々はそれら2者ともどもに打ち負かされつつあるのだ。[43] ドレフュス主義はひとつの宗教であった。[44]……キリスト教的なものであった。（だが）教会の政治的なすべての力は（あのとき）ドレフュス主義を敵とみなしていた。しかも，教会の政治的なすべての力は常に神秘を敵にしていた。とりわけキリスト教的神秘をである。》（下線筆者）

イエズスの《復活》を持たないジャンヌの死は敗北である。がしかし，イエズスの磔刑もまた無意味ではなかったか，と言う問いは，地上的なまま敗北するジャンヌを描いたペギー自身の問いかけに重なり合わされる。そこに，ジャンヌの《最後》（火刑の場）を描くことをしなかったペギーの意図がある。

'97年の「J·D」には，極端に言うなら，修道女ジェルヴェズを例外として，神への帰依は大筋においてカッコにくくられ，神への讃美はありはしない。むしろ〈楽園〉は神なしで，神秘をただ圧殺する権威ずくめの神

(カトリックないしは教会) なしで作り得ると考えていたペギーには《調和ある都市》へのプランがより現実的なものとなる。従って，このほぼ同時期に書かれた2作品は共に地上的な理想と失遂の両極を描いた作品と考えられる。しかし，逆に，それらの作品の背後でペギーを支えて来た死者，マルセル・ボードワンとペギーの関係は，この後急速に遠去かる。むしろ彼らは互いに対立し合う関係となる。死者は完全に葬られる。[46]

[Ⅲ] 1910年の「ジャンヌ・ダルクの愛徳の神秘劇」[1]

'97年の「J·D」から'10年の「M·J·D」までのペギーがその生活面においてどの様な状態にあったかごく大雑把にとらえれば次の様な3点に絞られる。[2]

1) 身体的不調,[5] 2)「カイエ」の財政的破綻,[4] 3) 精神的危機[5]

こうした物心両面の苦悩の中でペギーの《回心》[6]が突然果たされる。これは，ペギーにとって1つの神の召命 (vocation) であり，ペギーにとって「ドレフュス事件」が神秘的な神の召命において成された参加行為であった様に,[7] この場合もまた，1つの神秘がペギーに働いた。そうした変貌の中で「M·J·D」は書かれた。その意味において，ペギーが当初考えていた作品タイトルが「ジャンヌ・ダルクの召命の神秘」[8]（下線筆者）であったと言う事は重要な意味を持つ。

[III]—A 特色

'97年の「J·D」は [II]—A で示した様に史実に忠実である。だが，'10年の「M·J·D」は，註 (8) で明らかな様にわずか「J·D」の第1幕，5場までがカバーされるにすぎず，舞台はドンレミ，登場人物はジャンヌの他にオヴィエット，修道女ジェルヴェズに限られる。即ち，ペギーはジャンヌ・ダルクの史実に依る展開を捨て，オヴィエット，修道女ジェルヴェズと言う史実外の人物とジャンヌの対話だけに焦点を絞り，ひたすらに3人の内面（対立）を追う。ただわずかに洩れるジャンヌのセリフの端々に，

ジャンヌの裁判記録からの引用（転用）が控え目に顔を出すにすぎない。そして，この長大な作品中に，思いもかけずに《キリストの御受難（passion)》物語が挿入される。[9] 即ち，ペギーはルーアンに致るまでのジャンヌの史的物語性にわずらわされる事なく，召命を受けた少女ジャンヌの予感に満ちた神秘を通して《戦闘》も，《裁判》もない，謂はばヴェールを被った1少女の，《歴史》に登場する以前の人間的生活の枠内に生きる13歳の小女と共に，己れ（ペギー）の信仰回復と召命の意義を跡づける。それは完全に思念の世界であり，劇的場面構成は1貫して論理上の追求，対立に向けられ，13歳の小女の口調は通常における《小女》性をさえ失なう。[10]

[Ⅲ]-B　作品の意味

先に論じた「J·D」におけるジャンヌを中心とするオヴィエット及び修道女ジェルヴェズの立場（考え方）は「M·J·D」においても，そのまま守られ，更にそれぞれの性格は精緻に拡大される。[11] 従って，ここでは「J·D」から継承増幅されたイメージ（テーマ）の発展をいくつか追ってみる。

A）　天と地のイメージ（テーマ）

唐突に，ジャンヌの唱える主禱文に初まる[12]この作品は，その開幕から地上（ジャンヌ）なるものが天上(神)なるものに激しく対峙する様相をもつ。

la maison temporelle (de la terre) ⟷ l'église
dans le ciel,[13] la bataille humaine ⟷ la paix des cieux,[14] ・・

こうして多出する天と地の対立の中にあって，両極を結ぶイエズス磔刑の場への登攀が挿入される。[15]

A)—1　下から上へ（上昇）

《イエズスよ，イエズスよ，いつの日にか，あなたは，かの国の山頂で，あなたは人々に恵みを垂れ，人々に涙し……》[16]（山上の垂訓を指す）《イエズスは丘の小径を登った。エルサレムよ，エルサレムよ，お前はローマより祝福されていた》[17]《ベトレヘムよ …… お前は永遠にキリスト教徒のすべ

ての町上の上に，我々のお暗い町々の上に久遠に輝くだろう[18]》《イエズスは地上の家を離れ天上の家に向かう[19]》《聖母マリアもまた受難の道を登る，彼女も登る，登る，群集に混じり，ほんの少し御子の後方を，ゴルゴダの丘に登りたもうた。その頂きに登った。その頂きまで登った。[20]》《彼女の死と彼女の昇天の日，彼女の死と彼女の昇天のあと。永遠に……[21]》《イエズスは彼女に己が十字架の道程を歩ませた。遠く，近く，充分に遠く，充分に近く，彼女はついて行った。彼女の苦しみよりもっと苦しい十字架の道程を[22]……しかし彼は《神》であった……，彼は人間的な死が自ずからに登ってくるのを感じていた，泣いている母，そして十字架の真下で苦しんでいる母を目にすることなく……[23]》（下線筆者）

この延々と続く上昇の感覚は天と地の中間に屹立する十字架上のイエズスをくっきりと浮び上らせる。それは，場所からも（ゴルゴダの丘），道程からも（イエズスの1生，または丘への登攀），磔刑からも，人類の頂上で，最も神に近い場所での《御受難》を，ダイナミックに表現する。

A)—2　上から下へ（下降）[24]

天(神)から与えられる恵み (bénédiction) は，地上に降る《雨》と表現される。《あなたは，あなたの恵みを雨の様に，慈雨の様に，地上に恵みをもたらす雨，の様に，恵みの雨，地上にとっては秋の雨，あなたのすべての子供達の頭上に降り落ちる雨の様に注がせたもうた。[25]》その天上からの雨（恵み）はブドウを，小麦を実らせる。そのブドウ(酒)は《イエズスの食卓に供され，イエズス御自身によって飲まれ，……イエズスの血となったのです[26]》そして小麦から作られたパンは《御身体に変わった[27]》のである。

天上からもたらされた地上への奇跡，それはイエズスの御生誕である。それは《マテオによる福音書》の引用によって引き出され《御受難》の物語に組み込まれる。更に天上からもたらされた地上の奇跡として，あるいは神の召命として，ジャンヌへの呼びかけがある。これは当然「M·V·J·D」部分に集中し[29]，'97年の「J·D」より，その展開は複雑で広義である。ジャンヌは言う。《私達は皆，救われた者達々としての召命をもっています。

キリスト教徒は皆，己れの救済を成すための召命をもっています。そして，残りの人々は，キリスト教徒になるという召命をもっているのです。[30]》ジェルヴェズは言う。《あなたは（ジャンヌのこと），きっと何か特殊の恩寵をもっているのです。何か特有の思寵を。神の思召しは計りがたいのです，[31]……娘よ，あなたの内に何か普通でないものが起きたのです。何か，そう，超自然的な何かがです。[32]》そして '97年の「J·D」と同じ《お告げ》（召命）がここでも繰り返される。[33]だが，'97年の「J·D」第1幕，5場にあったこの《お告げ》がここでは最終部に置かれている。しかし，それには長い伏線がある。即ち，この《お告げ》を引き出すものは，作品冒頭の主禱文中後尾にある。《……神よ，キリスト教徒が14世紀過ごした今，多くの聖女，聖者の輩出したあと，あなたへの多くの殉教者達のあと，あなたのひとり子の御受難と死のあと，更に新らしきものをお与え下さいませ……つまり，神よ，私達が今必要としているのは，私達におつかわしにならなければならないのは，1人の聖女です，……事を成し遂げる……[34]》（下線筆者）。その《聖女》はジャンヌ自身であり，彼女は選ばれて，神の召命が（天使を通じて）彼女に下る。更に小村ドンレミは小村ベトレヘムと並置される。《誰も，決して永久（とわ）にこのドンレミの小教区を覚えてなぞいまい。誰れも，このドンレミの小教区の名なぞ知りはしまい。誰れも，それが存在したと言う事さえ知りはしまい。

「ユダの地ベトレヘム，おまえはユダの村々の中で，もっとも小さなものではない。わが民イスラエルを牧するかしらはお前から出るからである。[35]」》

即ち，神によって意図されたジャンヌの召命は，イエズスの道程と一致するのである。ジャンヌはイエズスの道程を辿る。[36]イエズスの御受難は，ジャンヌの受難を象徴する。故に，演劇的均衡を破って，延々と続く《passion》が挿入されたのである。その《passion》こそが，ペギーが切り捨てた '97年の「J·D」の史的部分，そして，「J·D」が描かなかった火刑の場をも超えて，ジャンヌの普遍と栄光を代弁する。そこで，A)—1 及び A)—2 のイメージ（テーマ）は，次の十字架のイメージ（テーマ）に集中する。

即ち，ルーアンでの火刑台におけるジャンヌの《意義》へ向けてである。

B） 十字架のイメージ（テーマ）

《十字架》をめぐる対話部分は数多い[37]。が，要約すれば'97年以来のテーマ，磔刑のイエズスの意義は無効ではないか，とするジャンヌの疑念である。それは磔刑のイエズスの死は救いをもたらさないのではないか，それは無意味だったのではないか，と言う問いであり，1種の虚無感の表明ともなる。

《私達すべての努力は虚しい，私達の愛徳は虚しい[38]。》《神よ，あなたのひとり子の血は虚しく流されたのでしょう，その血は1度，そして何度も虚しく流されたのでしょう[39]（殉教者達の死を指す，筆者註）》《あなたは，あなたのひとり子を虚しくこの世におつかわしになったのでしょう，イエズス様は虚しく亡くなられたのでしょう[40]》ならば，やはり《様々な愛徳は虚しいのです[41]》だが，ここに'97年の「J·D」を超えて1つの大きな転回が用意される。

《あなたのひとり子の肉と血，その血によって出来た金貨，銀貨で，あなたの御子の様々な御功績によって，永遠に贖われているのは，神よ，あなたなのです[42]》《（殉教者達は），彼らの虚しい血を流した。彼らの流した血の思い出において，イエズス様の為に流したその血の思い出において，彼らは彼（イエズス）のために死んだのです，彼（イエズス）が私達のために死んだ様に……私達のフランスが神の家であります様に[43]……神の家は殉教の儀式によって聖なるものとなるのです》

磔刑のイエズスの死，その贖罪の血は有効なのである。ジャンヌの価値ある《新らしき》殉教への道が確認される。即ち，'97年の神なしの「都市」が神います「都市」（フランス）へと変貌する。《かつて，人間があなたに必要とされたことはありませんし，あなたが人間にこんなに必要とされた事はありません。あなた達（神と人間）は1対なのです。あなた方はお互いの為に創られたのです[44]。》《イエズス様は我が父，とはおっしゃいませんでした，我々の父，とおっしゃったのです。……神よ，私はあなたの御手の内におります[45]》

'97年の「J·D」は天上と地上の決裂にあった。'10年の「M·J·D」も天と地の鋭どい対峙に初まった。しかし，天と地の狭間に立つ十字架上のイエズスの死を，救済の成就と見，ジャンヌの道程をイエズスのそれに重ね合わせる時，'10年の「M·J·D」における地上は天に融合してゆく。《大地は，教会の歩みに似ております。大地は，教会への歩みが教会に昇り，入る様に，それは天に昇る歩みの場です。私達は，大地があなたの御国の敷居である事を欲求いたします。あなたの御国の入口は，あなたの御国に昇り，入る大門の入口なのです。この大地が，あなたの御国の大門であります様に。[46]》《私は苦しみの道から天に昇る人間の声が好きです。[47]》(下線筆者)ここにも，上昇の感覚が繰り返される。地上なるものを歩むジャンヌの道程は，天への階を昇るのであり，重ね合わされたイエズスの上昇共に，ダイナミックな展開を示す。それは見方を変えれば，《地獄落ち》からの脱出でもある。[48]

結論にかえて

'10年以後のジャンヌ・ダルク

'97年の「J·D」に（カトリックの）神との和解はなかった。だが'10年の「M·J·D」にはペギー個人の突然の《回心》の上に以上の様な展開が見られた。

「J·D」を考える時「調和ある都市」がそれと1対をなす様に，もし「M·J·D」にそれを求めるなら1909年，夏頃から執筆された「クリオ，Ⅰ」及び「クリオ，Ⅱ」が更に豊かな「M·J·D」の補足をなすだろう。——実際「M·J·D」及び「M·V·J·D」のある部分は，その文脈上の論旨，文章そのものが同一のまま「クリオ，Ⅰ及びⅡ」の中に散見される。[1]——

「J·D」で芽生え，「M·J·D」で開花したペギーのダイナミックなイメージは，大地と天を含め，様々な変容を遂げつつペギーの詩作品の中に更に熟成した形で注ぎこまれる。あえて言うなら，'10年以後のペギーは詩作の時代に入る。

その詩作品の中，1911年の《第2徳の秘義の大門》[2]，1912年の《罪なき嬰児たちの神秘劇》[3]，同年の《聖女ジュヌヴィエーヴとジャンヌ・ダルクの綴織》[4]等に，ジャンヌ・ダルクの断片を見出す。それは，まさに断片であり，'97年の「J·D」よりも，'10年の「M·J·D」よりも更にペギーによって，独得の《抽象化》をほどこされた断片的なジャンヌ像である。即ち，「M·J·D」において，イエズスに接ぎ木されたジャンヌは，更にジャンヌ・ダルク，と言う音の響きだけになるかの様に思われる。まさに，ジャンヌ・ダルクは以後の作品（散文作品を含めて）何度となく現われる。ある時は前後の文章の脈絡上，論理的に，ある時は唐突に，現われる。それらのジャンヌ，はいずれにせよ，'97年の「J·D」から出発し，徐々にその《歴史的側面，記述》[5]を切りおとし，ジャンヌ・ダルクと言う名から瞬間的に連想する何か——例えばイエズス，と唱えられた時に瞬間的に連想する何か——に回帰する。即ち，ペギーが，オルレアンの生家で，目の前を通過する馬上のジャンヌを目にした幼ない日の鋭どい感覚に回帰する[6]。その時，ジャンヌはペギーにとって，美であり，希望であり，善であり，地上であり，フランス[7]そのものとなる。そこに到るプロセスに，2つのジャンヌ・ダルク劇が狭まれている，と考える。

註

略号について

プレイヤード版 (Bibliothèque de la Pléiade)

A) oeuvres en prose, 1898–1908 ⇒ pl. tome 1

B) oeuvres en prose, 1909–1914 ⇒ pl. tome 2

C) oeuvres poétiques complètes, ⇒ pl. tome 3

《A)=1959　B)=1961　C)=1975》

以下，略号は必要に応じて初出の際に示す。

[I] 1897年の「ジャンヌ・ダルク」まで

(1) この時期までのペギーを論ずるものとしては，
《Péguy》 Daniel Halévy, éd. (Grasset) Le livre de poche, 1979, p. 85–p. 110.

《Expérience de ma vie, Péguy》 Jules Isaac, 2 vols の内 tome 1, éd, Calmann-Lévy, 1960.

《Péguy, soldat de la vérité》 Roger Secrétain, éd, Librairie Académique Perrin, 1972, p. 46-p. 143.

《Péguy》 Daniel Halévy, éd, Grasset, 1941, P. 11-p. 52, が詳しい。

(2) オルレアンは，1429年，ジャンヌ・ダルク率いるフランス軍によって，イギリス人の手から解放された町である。

シャルル・ペギーは，この町のフォーブール・ブルゴーニュ48番地に生まれた。その家の窓から，ペギーは，度々ジャンヌ・ダルクの大祭の日，馬上のジャンヌが通過するのを目にして育った。

(3) 《Péguy, soldat de la vérité》 Roger Secrétain, P. 27-p. 28 参照。

(4) この時代のペギーは，悲劇的人物に対する好みが強かった。

《Péguy》 Daniel Halévy, p. 106-p. 110.

《Connaissance de Pégay》 Jean Delaporte, éd, Plon, 1959, p. 83-p. 95 参照。

(5) 1894年11月7日，ペギーは，合格した「エコール・ノルマル」の図書室から，アンリ・ワロンと *ジュール・キシュラによるジャンヌ・ダルクに関する2冊の本を貸り出している。次いで1895年3月29日には，*キシュラによる五巻本からなるジャンヌの裁判記録その他を貸り出している。《Péguy》 B. Guyon, éd, Hatier, 1913, p. 45 参照。

*Jules Quicherat によって1841年から1849年にかけて書かれた〈フランス歴史学会叢書〉のための5巻本は，ジャンヌ・ダルクを知る上で重要な資料として名高い。

Jules Quicherat ; Procès de réhabilitation et de condamnation de Jeanne d'Arc. Paris, 1841, 5 vols.

(6) ペギーは作品執筆前に，ジャンヌ・ダルクの生地，ドンレミに小旅行をしている。

(7) 1895年の書簡：《Introduction aux "Trois Mystères" de Péguy》 Jean Onimus, éd, Cahiers de l'Amitié Charles Péguy, 1962, p. 21 参照。以後，「I.T.S.」 J. Onimus と略す。

(8) Marcel Baudouin は1896年7月25日，土曜日に夭折する。彼はペギーの，サント＝バルブ校時代の友人（親友）。

Marcel Baudouin の家族及びペギーとの関係については，《Le destin de Charles Péguy》 Marcel Péguy, 1941, éd, Perrin が詳しい。

但，同書が，ボードワン家の家系を重要視しすぎる，やや偏向した見方がある，として批判的なのはロマン，ロランである。しかし「カイエ」以前のペギーを叙述したペギーの子息による1種のドキュマンとしては，すぐれてい

る，と筆者は考える。

(9) 1897年10月のこと。
彼女もまたボードワン家の思想を亡くなった兄ともどもはっきりと継承していた。詳しくは註(8)の本にゆずる。また，彼女の持参金で，ペギーは「カイエ」の出版を手がける。

(10) 「半月手帖」=《Cahiers de la quinzaine》以後「カイエ」と略す。
「カイエ」septième cahier de la première série,《Toujours de la grippe》(le 5, avril 1900), pl. tome 1, p. 199.

(11) 「ジャンヌ・ダルク」以後「J·D」と略す。
Ⅰ：ドンレミ，Ⅱ：戦闘，Ⅲ：ルーアン

(12) この事に関して，ロマン・ロランは，次の様に述べている。
《なおも1年間，生きている者と書きつづけると言う，死者の生存に関するこの驚くべき確認は，ペギーと言う忠実で野生的な心情のなかなる，死を否定し，他界したものの現存を頑強につなぎとめようとする愛の炎を証し立てているのだ。》「ペギー」みすず書房，山崎庸一郎，他訳，1965, p. 52.

(13) 「J·D」の献辞は，マルセル及びピエール・ボードワン(自著)でしめくくられている。また，「マルセル，調和ある都市」の最終部は，「1898年4月，パリにて脱稿，ピエール・ボードワン」とある。またペギーが初期の論文で用いたペンネームはピエール・ドルワール（ロワール河のピエール）であり，ペギー自身の回想記とも言える1篇（死後出版，pl. tome 1 所収）の題名は「ピエール，あるブルジョワ生活の初まり」である。

(14) 註(12)及び(13)参照。

(15) 「ペギ」ロマン・ロラン著，みすず書房，p. 59, p. 180 参照。またペギー夫人は，その子供への洗礼行為の実施を拒否している。

(16) 同書の冒頭部分はこう初まる。「マルセルがオルレアンにいる私に会いにやって来たのは1896年6月7日，日曜日のことで……」pl. tome 1, p. 11.
1896年6月7日とは，ドュリューで兵役に服していたマルセル・ボードワンが，許可を得て，オルレアンにいるペギーに実際に会いに来た日である。

(17) ペギーはこのあと約10年間，この2作品(の量)に匹敵する作品を書いていない。社会主義的小論文は別にして。

(18) 《La religion de Péguy》Pie Duployé, éd, Slatkine Reprints, 1978, p. 25 参照。

(19) pl. tome 1, p. 22

(20) 同 p. 4-p. 5

(21) 同 p. 36

(22) 同 p. 12

(23) 同 p. 48-p. 49

(24) pl. tome 1, p. 33
(25) 同 p. 45
(26) 同 p. 20
(27) 同 p. 27
(28) 同上
(29) 同 p. 43
(30) 同上
(31) 同 p. 36「調和ある都市」に受けつがれる古代性とは 1) les anciennes croyances 2) les anciennes religions 3) les anciennes vies 4) les anciennes cultures 5) les anciennes philosophies 等であり，1) 及び 2) で示される様にペギーは宗教そのものを否定している訳ではない。
(32) pl. tome 1, p. 42
(33) 同 p. 12
(34) 同 p. 18-p. 21
(35) 《La religion de Péguy》, p. 34 参照。
(36) 《République socialiste universelle》この言葉は，「J·D」の《献辞》にある。なお，ペギーの「調和ある都市」に影響を与えたものとして，
1) 《La cité antique》Fustel Coulange,
2) 《La cité de Dieu》Saint Augustin,
3) 《L'histoire romaine》Michelet 等が考えられる。
またプラトン，カントらの影響を見出す事も出来る。これらについては《Péguy et le monde antique》Simone Fraisse, éd, A. Colin, 1973, p. 171-p. 172 参照。
(37) 註(36)参照，及び《La religion de Péguy》p. 30-p. 34 参照。

[II] 1897年の「ジャンヌ・ダルク」

(1) pl. tome 3, p. 29-p. 53
(2) 第1幕，5場から Jeanette が Jeanne にかわる。
(3) pl. tome 3, p. 56-p. 88
(4) ロベール・ド・ボードリクールは当時，ヴォクールール（ムーズ県）の隊長だった。ジャンヌは1428年5月と翌年の2月，伯父に併なわれてボードリクールに会いにゆく。
《フランス人の歴史》巻 I, P. ガクソット，林田他訳，みすず書房，1972, p. 259 参照。
《ジャンヌ・ダルク》アンドレ・ボシュア，新倉俊一訳，白水社，1969, p. 36-p. 37 参照。
(5) ジャンヌが《伯父》と呼んでいたデュラン・ラクサールの事（註(18)参照）。

(6) pl. tome 3, p. 89-p. 95

(7) ジャンヌは同年4月29日にオルレアンに入った。
作品では，4月30日についで，5月5日，5月8日のオルレアンが描かれる。史実を追うと，5月4日：サン＝ルー砦奪回，5月5日：ジャンヌ，3通の降伏勧告書簡をイギリス軍に出す，5月6日：オーギュスタン砦奪回，5月7日：トゥーレル砦奪回，ジャンヌ負傷，5月8日：オルレアン解放。作品は，これらの史実をほぼ忠実に踏まえている。

(8) 註(7)の出来事が会話の中にほぼそのままに組みこまれている。

(9) pl. tome 3, p. 99-p. 150

(10) 9月8日，パリ攻撃。

(11) pl. tome 3, p. 152-p. 207

(12) pl. tome 3, p. 208-p. 219

(13) '30年12月23日ジャンヌ，ルーアンに到着。
'31年2月21日ジャンヌへの尋問開始。
同年5月9日，ジャンヌ拷問のおどしを受ける。

(14) pl. tome 3, p. 223-p. 323.

(15) 5月23日，ジャンヌに対する最後の説諭。
5月24日，サン＝トゥアン墓地で，ジャンヌ改宗宣誓に署名。
5月28日，異端再犯に関する尋問。
5月30日，ルーアンのヴィューマルシェ広場で，ジャンヌ処刑される。(火刑)

(16) pl. tome 3, p. 324-p. 326.
*註，ジャンヌの史実に関する註は，
《Jeanne d' Arc》 Régine Pernoud, Collection "Le temps qui court" éd, Seuil, 1959, p. 183-p. 185 の年表を用いた。但し，この年表の各事項の日付はアンドレ・ボシュアの年表と若干相異（最大前後1日のずれ）するが，それはキシュラの記載により近い。

(17) 例えば，1429年3月6日のジャンヌの王太子との謁見のエピソード，同年7月17日のシャルルⅦ世のランスにおける聖別式，そして，火刑台上のジャンヌのエピソード等。

(18) ジャンヌの実父 Jacques d' Arc, 実母 Isabeau d' Arc, ジャンヌの(伯父) Durand Lassois (Laxart), Robert Baudricourt, Jean, Duc d' Alençon, Regnault de chartres, Gilles de Rais, Pierre Cauchon, 等々。

(19) pl. tome 3, p. 59-p. 60

(20) 同 p. 60-p. 61

(21) 同 p. 64

(22) 同 p. 33

(23) 同 p. 34

(24) pl. tome 3, p. 32

(25) ベガンは，ペギーの《小教区》を次の様に考えている。
《〜彼の《小教区》に対する愛情はいやます。それは，信仰の具体的で了解可能の形態なのであるから。》
《La prière de Péguy》 Albert Béguin, éd, La Baconnière Neuchâtel, 1942, p. 17 参照。

(26) 例えば，ジャンヌの「ムーズ川に寄せる歌」pl. tome 3, p. 80-p. 81, 及び p. 93 等，大地に寄せる愛は深い。
《ペギの詩における「大地」のイメージ》「絶対への渇望」饗庭孝男，勁草書房 1972, p. 273-p. 300 参照。

(27) やや護教的内容だが，《Péguy devant Dien》 Bernard Guyon, éd, D.D.B. 1974, p. 49-P. 61 は，この見解の補足をなす。

(28) pl. tome 3, p. 40

(29) 《La religion de Péguy》 Pie, Duployé, p. 37-p. 46「La misère」の章，及び《La crise de la conscience catholique》 Robert Bassède, éd, Klincksieck, 1975, p. 592, はこの見解の補足をなす。

(30) 《ペギー》ロマン・ロラン，P. 61 参照。

(31) 「カイエ」《Toujours de la grippe》 1900年4月5日号，pl. tome 1, p. 192.

(32) エレミアの書： X：23, p. 1174
以後聖書からの引用文の訳はフェデリコ・バルバロ訳《聖書》(講談社版) 1980, を用い，ページ数は，La Bible de Jérusalem (大版)，Les éditions du CERF, 1974, で示す。(よって《マタイ》はマテオ，《ヤコブ》はヤコボ，《ベツレヘム》はベトレヘム等にかわる。)

(33) 「J·D」中の，飢えたる子供達のエピソード前後参照。pl. tome 3, p. 30 (このエピソードは「J·D」及び「M·J·D」に共通する。)

(34) pl. tome 3, P. 53.

(35) 《聖書の天地》犬養道子，新潮社，1981, p. 197.

(36) ジャンヌへの《お告げ》pl. tome 3, p. 52.
《ジャンヌよ，神がお前を今選びたもうたのだ，神の愛するこの王国からイギリス人を追い払うがよい。》

(37) pl. tome 2, p. 325-p. 326.
なお，ジャンヌがドンレミ出発を決意する言葉は次の通り，pl. 同，p. 65-p. 66. (ヴァリアント，pl. 同，p. 1552)。
《あなたが，私に戦いに行け，とお命じになられたのだから，私は行くでしょう。あなたが私に，王太子様の為に，フランスを救え，とお命じになられたのだから，私はそうする様に努力するでしょう。私はあなたに，どこまでも忠実である事を誓います。私はそれを望みます (以下ヴァリアント) 私は

あなたのしもべです。私はあなたにその事を，イエスズ様の御身体にかけて誓います。》

(38) ジャンヌの強い口調に，修道女ジェルヴェズは2度にわたり，こう言う。《お黙りなさい，わが子よ。あなたは神を冒瀆した。》pl. tome 3, p. 39.

(39) ドレフュス事件とペギーの関係は，卓越した名評論「ドレフュス事件」渡辺一民著，1972，筑摩書房，に詳しく，また「ドレフュス事件とゾラ」稲葉三千男著，1979，青木書店，にも，1部ペギーに触れた個所があり興味深い。

(40) pl. tome 2, p. 518

(41) 同 p. 528

(42) 同 p. 535

(43) 同 p. 550

(44) 同 p. 580

(45) 同 p. 582

(46) 1910年の「ジャンヌ・ダルクの愛徳の神秘劇」の献辞はこうある。《1896年7月25日の想い出と共に，マルセル・アントワーヌ・ボードワンの意図にささげる。》

[III] 1910年の「ジャンヌ・ダルクの愛徳の神秘劇」

(1) 《Le mystère de la charité de Jeanne d'Arc》以後，「M·J·D」と略す。

(2) 「I.T.S.」J. Onimus, p. 26-p. 27 の分析を用いた。

(3) 1900年の流感，1908年の肝臓障害。

(4) 「カイエ」《我が友，我が予約購読者達へ》1909年6月20日号，に詳しい。

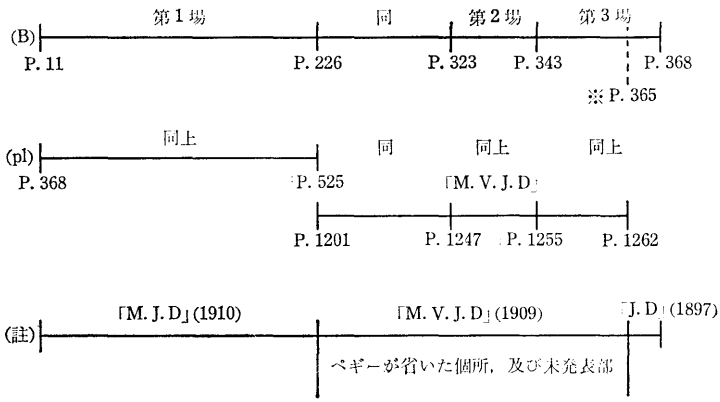
(5) 日常的には家庭内の不和；ペギーの《回心》に際しての。更に，近代《歴史学》への懐疑
《老い》につての急速な認識(他) 「クリオ」へ，

(6) ジョセフ・ロート（ペギーの友人で，クータンスのリセの教師）の証言。《Lettres & Entretiens》éd, De Paris 1954, p. 57 より。《1908年，私は疲れ切り，病いにふせっていたペギーに会った。12年間の変わることのない大きな疲労が，彼をついにこなごなにしてしまったのだ。私自身も大きな不幸にみまわれていた。（ロートの娘，モニクの死，筆者註）彼は私に彼の苦悶，彼の疲労，休息への渇望について語った。例えば，何処か田舎の遠い所にあるリセで，私の傍で哲学の授業を，小さなクラスでやってみたい，とか。その時，彼はひじをついて起き上り，目にいっぱい涙をためて，こう言ったのだ。
——僕は君にすべてを言った訳じゃないよ。……僕は信仰を見出したのだな。……僕はカトリック教徒になったのだよ。——それは突然の愛による，大きな心情の衝動のようだった。》

更に大著《Charles Péguy》Henri Guillemin, éd. Seuil, 1981 の内，第8章《Péguy croyant》P. 250-p. 291 は重要。(但，ペギーの回心が，ペギーのナショナリスムの発揚と見る論旨には，筆者は賛同しかねる。)

(7) pl. tome 2《Notre jennesse》p. 581《C'est une vocation. Une destination.》

(8) 《Le mystère de la vocation de Jeanne d'Arc》この部分は，プレイヤード版では，pl. tome 3 p. 1201-p. 1262.
A. Béguin 版《Le mystére de la charité de Jeanne d'Arc, avec deux actes inédits》éd, club du meilleur livre, 1956, では p. 226 以後にある。前者の版は《附録》として，後者の版は作品の1部として(図示)。このことに関して枚数の都合上触れられないが，詳しくは Béguin 版所収の作品成立史《Histoire du mystère de la charité de Jeanne d'Arc》par Albert Béguin, p. 321-p. 418 及び「I.T.S.」J. Onimus, p. 30-p. 33 参照。以後，本論文では，Béguin 版を底本とし，ページ数は (B) p. —，と示し，便宜上，プレイヤード版のページ数も併記する。なお「召命の神秘」は「M·V·J·D」と略す。



※ベガン版はこの後，'97年の「J·D」pl. tome 3, p. 52,《Il me faut...》より，p. 53 最終部までをとり入れ，全体を「M·J·D」と考えている。筆者も同じ考え方をとる。

[III]—A 特色

(9) pl. tome 3, p. 439-p. 520, どこから，どこまでが《passion》の部分かは，他の考え方もあろう。

(10) ジャンヌの言葉(セリフ)は，その論旨，展開からみて，13才の小女のもので

はありえない.

(11) オヴィェットのスケッチとして，更に《Jeanne et Hauviette》(variation ancienne sur le début du drame de Jeanne d'Arc), pl. tome 3, p. 1179-p. 1196 を参照する必要がある.

《修道女ジェルヴェズはカトリック教会——すなわちその誤謬，そのエゴイスム，その傲慢を有しながら，なおかつ，その聖なる性質を保持している教会を象徴する像である。》「ペギ」ロマン・ロラン，p. 212.

この修道女ジェルヴェズの性格，「M·V·J·D」における彼女の変貌については，本稿では触れない。

A) 天と地のイメージ（テーマ）

(12) (B) p. 13-p. 17 pl. tome 3, p. 369-p. 372.

(13) pl. tome 3, p. 416-p. 417

(14) 同 p. 1214-p. 1215

A) 下から上へ（上昇）

(15) 「クリオ，I」《ゲッセマニとゴルゴタにおけるキリスト》p. 233-p. 247 参照。上記のテキストは，山崎庸一郎訳，中央出版，昭和52年，である。同書は「クリオ，I」及び「クリオ，II」を大幅なカットと，見出しをつける事で訳出されたものである。従って，原書には《ゲッセマニ云々》はない。なお「クリオ，I」及び「クリオ，II」は執筆年代が「M·J·D」と近接ないしは重複している。

(16) (B) p. 54 pl. tome 3, p. 400

(17) 同 p. 55 同 p. 400

(18) 同上 同上

(19) (B) p. 101 pl. tome 3, p. 435

(20) 同 p. 142 同 p. 452

(21) 同 p. 144 同 p. 468

(22) 同 p. 158 同 p. 478

(23) 同 p. 168 同 p. 478

A)—2 上から下へ（下降）

(24) 《第2徳の秘義の大門》（希望の讃歌）猿渡重達訳，中央出版，昭和53年，第6章《降下》p. 179-p. 211 参照，同書は《Le porche du mystère de la deuxième vertu》(1911) の邦訳。

(25) (B) p. 34 pl. tome 3, p. 384

これは《マテオによる福音書》V：45 からの転用である。原文は次の通り。

《天の父は悪人の上にも善人の上にも日を昇らせ，義人にも，不義の人にも雨を降らせる》p. 1422.

(26) (B) p. 35　pl. tome 3, p. 385

(27) 同上ページ，パン及びブドー(酒)はキリスト教における1つの象徴である。

(28) (B) p. 55　pl. tome 3, p. 401 後述する。

(29) 残念ながら，本稿では「M·J·D」と「M·V·J·D」の成立状況，関連等には触れない。

(30) (B) p. 230　pl. tome 3, p. 1204

(31) 同　p. 231　同　　p. 1205

(32) 同　p. 238　同　　p. 125，ここに修道女ジェルヴェズの《聖なるもの》(註(11)参照) とその変貌がある。

(33) (B) p. 359　pl. tome 3, p. 1258
〈1897年の「ジャンヌ・ダルク」〉の項，註(36)参照。

(34) (B) p. 17　pl. p. 372

(35) (B) p. 55　pl. p. 401
なお「　」中は〈マテオによる福音書〉II: 6 からの引用である。(ベギー自身の)，p. 1416.

(36) 《マテオ，マルコ，ルカらがイエズスのために記したものは，公証人がジャンヌ・ダルクのために記したものである。イエズスのための福音書は，ジャンヌ・ダルクの裁判記録である。》
(《デカルト氏に関する覚え書補遺》) pl. tome 2, p. 1481
《コルネイユはジョワンヴィルと，裁判記録（ジャンヌの）は福音書と，ポリュークトは聖王ルイと，ジャンヌ・ダルクはイエズスと共に歩く。》(同，pl. tome 2, p. 1471)
《福音書はイエズス・キリストの裁判記録（ジャンヌのそれにかけている，筆者註）に多くの部分を割いている。》pl. tome 2, p. 1480。即ち「M·J·D」の中でのイエズスの《裁きの場》は，ルーアンの《裁判》と並置ないしはそれを代行（代弁）している。更に「クリオ，I」に描かれるイエズスの御受難はドレフェス事件と重ね合わされている事にも注意したい。

(37) croix そのものが出ている個所，例えば pl. tome 3, p. 375, p. 376, p. 414, p. 419, p. 428, p. 461 等。

(38) (B) p. 31-p. 32　pl. tome 3, p. 382

(39) 同　p. 36　同　　p. 386

(40) 同　p. 54　同　　p. 399

(41) 同　p. 79　同　　p. 418

(42) 同　p. 285　同　　p. 1230

(43) 同　p. 309-p. 210　同　　p. 1239

(44) 同　p. 255-p. 256　同　　p. 1217

(45) 同　p. 254　同　　p. 1217

(46) pl. tome 3, p. 1244
《歩く》行為,《垂直的な象徴化》については
《L'imagination du mouvement dans l'oeuvre de Péguy》Joseph Bonenfant, éd, C.E.C. de Montréal, の第1章 (p. 16-p. 52)《En marche》, 第6章の2《La symbolisation verticale》p. 267-p. 286 参照。

(47) pl. tome 3, p. 1256

(48)《L'imagination du mouvement dans l'oeuvre de Péguy》p. 308-p. 309 参照。

結論にかえて

(1) 同時に, この両者には重要なテーマ《秘跡論》及び《聖体拝領》に関する問題があり, それは「M·J·D」に深く関係するのだが, 本稿では触れない。

(2)《Le porche du mystère de la deuxième vertu》
※《第2のジャンヌ・ダルクを書く, それはこれだ》とペギーが言って書かれたこの作品に, ジャンヌの姿はない。むしろ, それはジャンヌの持つ象徴的な雰囲気なのだろうか?
※「I.T.S.」J. Onimus, p. 48-p. 49 参照。

(3)《Le mystère des saints Innocents》

(4)《La Tapisserie de Sainte Geneviève et de Jeanne d'Arc.》

(5) ペギーは, 歴史の外縁をなぞる様な機械的な歴史記述, 歴史観を強く嫌っていた。

(6) 例えば《La Tapisserie de Sainte Geneviève et de Jeanne d'Arc》において,《馬上のジャンヌ》のイメージ (幼ない日に, ペギーがオルレアンで目にしたであろう, ——1897年の「J·D」の項, 註(2)参照——) が現われる事に注目したい。pl. tome 3, p. 842

(7)《L'univers féminin dans l'oeuvre de Charles Péguy》Robert Vignault, éd, D. de Brower, 1967, p. 236-p. 253 参照。